城之内

椎名誠

新潮文庫

蚊（か）

新潮文庫　し－25－2

昭和六十二年六月十五日　印刷
昭和六十二年六月二十五日　発行

著者　椎名誠（しいなまこと）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六－五一一一
編集部（〇三）二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Makoto Shiina 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-144802-7 C0193

新潮文庫

蚊

椎名誠著

新潮社版

3828

目　次

真実の焼うどん……七
さすらいのデビルクック……三七
戸間袋急行……六九
山田の犬……一〇一
蚊……一二三
海をみにいく……一四九
よろこびの渦巻……一七九
波濤のむこう側……二一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

日本読書公社……二四一
あとがき……二六八
居直りながらはにかんだ貌……村松友視　二七〇

蚊

真実の焼うどん

さて、これで一応材料は全部揃ったわけだな。間違いないだろうな。

ええと。とりあえずテーブルの上にぶちまけてしまう。男らしく全部ぶちまけてしまう。しかしこういうのはあまり男らしくとはいわないのかもしれないな。でもまあしかしぱっとぶちまけてしまう。

ええと。

まず長葱がいちわ。うーん。やっぱりいちわというのがあきらかに問題なわけだな。なにしろ二人分なのだ。二人分つくればいいわけだから「いちわで長葱五本」というのは多い。どう考えても多いねこれは。

でもしようがない。

聞いたらバラ売りの長葱というのは売っていない、というのだからしようがないのだこれは。しかし曲女屋のあのばあさんというのは実際ほんとにはらがたつな。何度行ってもそうなのだ。

「曲女屋のおたのしみスタンプカード」をあのばあさんはかならずごまかすのだ。

おれは今日、騙されまいぞ、と思ってじっと見ていたのだよ。

なにしろ今日はずいぶん買ったからな。二千円以上はたしかにあった。そうそう正確には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

二千三百八円だったのだ。そうして今日は十一日なのだ。毎月一のつく日は『曲女屋の出血疼痛大サービスデイ』だから、トータルで二千円以上の買物をした人には「曲女屋のおたのしみスタンプカード」の五十枚シートをくれることになっている。それなのにあのばあさんときたらまるでもうしらばっくれた顔をして、いつものように値段どおりのスタンプシートしかくれないのだ。

おれは睨みつけてやったね。今日が十一日ということを忘れているわけはないのだ。

げんにあのばあさんは、おれの二、三人前にいた岡惚荘のおかみさんにはちゃんと五十枚つづりのシートをやっていたのをおれは見ていたのだ。実際じょうだんじゃないのだ。

おれが心からムッとして曲女屋のばあさんを睨むと、ばあさんはそのときすこし頬のはじのほうで笑ったんだ。あれには腹が立ったね。思わずおれは左手のこぶしでどすんどすんとレジを叩いてしまったけれど近くにいた客がびっくりして、おれの立っているレジを眺めていたな。それでもばあさんはまだしらばっくれた顔をしていたのだ。

まったく思いだしただけでまた腹が立ってくるよ。

まあしかし今日はきちんとばあさんに文句を言って五十枚つづりを受けとってきたからいいけれど、それにしても新たな目下の問題は、この長葱の残りをどうするか、ということなのだ。

むかしは庭の隅なんかにちょっと小さな穴を掘って、そこに使わない余った長葱を入れて

土をかぶせておく、なんていうことをしていたのだな。思えばそうだった。昔の人はそういう知恵があったのだ。そういう努力も惜しまなかったのだ。えらいな。えらいえらいえらい。

――なんて、ずいぶん前に友子の前でそう言ったことがあった。そうしたら友子はぱっと赤い花がはじけるようにして、うーむ。赤い花がはじけるように……なんて我ながらずいぶん派手めで素晴しい形容だと思うけれどうーむコーフンするなあ。こういうおれの才能。うーんうーん。ま、しかしともかく友子ははじけながら言ったのだ。

「まあ！　素敵ね。昔の人は本当に素敵ね。そしてそういうことを沢山知っているヨシオも素敵、とても素敵！」

そう言ったのだ。この、はじけるようにして言った、というところがなんとも可愛いな。たまらないな。とおれはその頃思ったね。

あれは結婚してすぐの頃だったろうか。いやそうじゃあなかった。結婚してすぐの時じゃなくて、このマンションに越してきてすぐの頃だったのだ。そだそだ。そうだったのだ。

よくおぼえている。

あの頃のことは全部よくおぼえている。おぼえているのって愛だものな。そだそだ。

秋だった。

秋のまん中で、とても静かな日曜日だった。そうそう。あれは秋の静かな日曜の、風のやさしい午後でした……なんてうふ。まるで歌の文句みたいだけど。

そういえば、あの日たしかに部屋の中にミッチャム・イエローのスローバラード『こぼれ落ちる愛のしずくがこぼれた』の旋律が流れていたのだ。そだそだ。

それでベランダのところの硝子戸（ガラスど）を開けると、風がすーっと入ってきて、最初にまず窓のところの七色水玉レースのカーテンが風に鳴ったのだ。

さかさかさかさか。

と、あのときそういう音がしたのよ、と友子があとで言ったのだ。

あの時、風に踊る七色水玉レースのカーテンを眺めて入口のところに突っ立ったまま、友子がよろこんでいた。

「ねえ、ヨシオ。やっぱり五階はいいわね。風が抜けていくものね。通り抜けていく風が見えるものね。すがすがしくて気持がたまらないわ……」

なんて友子がまるでうたうようにして言っていたのだ。入口のところに立って、それからゆっくり上をむいてぐるぐる回りながら言っていたのだ。

「ねえヨシオ。風が通っていくよ。あたしの背中をすりぬけて風が笑って通っていくよ……」

なんて友子が言っていたのだ。いま考えてみると友子というのは天性の詩人だったな。言うことがいちいちヒトの心を揺すぶったものな。もっともヒトの心といってもとりあえずはおれの心だけだったけどな。しかしあの頃は、思えば本当におれたちの毎日というのはニュ

ーミュージックみたいな日々だったのだ。

「あの頃はぼくも君も風の中でくるくる回って、あの頃はぼくも君もしあわせだった……」

なんて、ちょっとここまでくるとすこしくすぐったいかんじだね。でもいいのいいの。

それでええと。

長葱をとにかく洗わなければならない。洗うのは二本。問題だけど二本。二本でも多いかもしれないからな。それで残りの三本の葱をどうするかという問題はやっぱり避けて通ることができなくなっているわけだ。

たぶん、というかおそらくきっと、この残りの三本は使わないかもしれない。そういうことがほぼあきらかになってきているな。うーん。そういうことをまた考えるとしだいに気持がひきしまるかんじになってきているな。

この「使わないかもしれない」というのがさびしいね。さびしいし衝撃的だよな。

そうそう。いつか友子が言っていたことがあった。あれはいつのことだったかなあ。そんなに前のことじゃあなかった。このマンションに越してきてしばらくしてから、という時ぐらいだったかな。

「ねえ、ヨシオ。使わない葱を庭の土に埋めておく、っていうのなるほどと思うけど、でもわたしたちどうやってもそんなことできないのよね。どう努力しようとしてもできないのよね。だってこのマンションにそんな庭なんてないじゃない。だからできないじゃない。しよ

うがないじゃない！」

なんて友子は言っていたのだ。

その頃からなんだか友子は妙にイラついていたけれどそれからすこしたって、友子はある日急に冷蔵庫の中のものを手当りしだいに外に放り出してしまったことがあった。

あの時はおれの前にいろいろなものがぽんぽん飛んできたな。べに花62％マーガリンとか味の紅屋の鮭のそぼろ煮とか曲女屋の豚の角煮とベーコン二〇〇グラムとか腰高食品のビタプラス濃厚牛乳とかおいしさ七十八倍ドメキ屋の根こんぶスープの素とか放り投げられた拍子にぐしゃりとつぶれた双眼ヨーグルトとか、そういうものがぽんぽんおれのところに飛んでくるの。眼の前にころがってくるの。

冷蔵庫の中のものは一度出したらきちんと蓋をしてまた元のところに戻しておくように。蓋のないものは透明ラップかミクロンアルミシールをかぶせてしまっておくように。缶詰類は一度あけたらかならず別の皿に移しておかなければだめじゃないかぐじぐじ。それから野菜をいつも友子はいっぺんに水につけてしまったりするけどえらく腐りやすいからね。あれは使う分だけ分けてとりあえずそれだけ洗えばいいわけなんだよ友子、ね。わかるだろぐじぐじ。葱なんかもむかしは泥のついたままにしておいたわけだからねぐじぐじぐじぐじ。それからぐじ。ぐじぐじぐじぐじぐじ。

などというふうにいろいろ気のついたことを言っていたら急に友子は半狂乱になってしま

ったのだ。

そうして「こんなもの、こんなもの、こんなもの！」とわめきながら冷蔵庫の中のものをみんな外に放り出してしまったんだ。あのときはじっさいおどろいた。手がつけられなかったからね。止めることもできなかった。

もっともあのときおれ酔っていたんだな。酔って寝ころがっていたの。おれわりとすぐ酔うからね。たいていビール中瓶二本で酔ってしまう。それですぐ酔ってすぐ人に文句いうからね。これだけはおれのちょっとよくない癖だな。おれ自分でそう思うもの、だいたいおれ欠点が少ない男だと思うけれどこれはだめ。どう考えてもこれはだめだろうな。それでまたすぐ酔って人にからむくせにわりとひとの言っていることおぼえてるからね。悪口なんか言われるとものすごく執念ぶかくおぼえているの。おれすぐ酔ってしまうけどそういうときはサメるのね。ほんとこれ、おかしいけどすごいのね。ぐふ。ぐふふふ。

おれ、やっぱり内面がいわゆるクールな男、というタイプなのかもしれないな。

うんうん、そうそう。それから次にエノキダケと。これは一袋全部使ってしまえるから気持がいい。だから全部ボウルにあけてしまうと。

これはアレね。バターでさっと炒めて塩をひとふり、その上に軽く醤油をかけてたべるとうまいんですね。うんうん。

しかしアレだね。エノキダケというのはなんとなくイメージとして『女学生』つうかんじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton